

平成29年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

国語科における言語活動の充実 ～付けたい力と手立てを明らかにして～

2 研究経過

第1回			第2回			第3回			第4回		
5/25	44名	益城中 央小	10/13	広安小	加来佐枝子 (教諭)	12/4	矢部小	坂崎慎太郎 (教諭)	1/26	嘉島西小	松本剛史 (教諭)

3 研究の概要

(1) 研究の内容

① テーマ設定

本年度の郡教科等研究会全体テーマ「児童一人ひとりが輝く『分かる・楽しい』授業づくり」を受け、小学校国語部会では昨年度設定したテーマと同様「言語活動の充実」として研究を進めていくことにした。国語科においては言語活動を通して言語能力を身に付けることがねらいであり、言語活動を通して指導事項を指導するものである。つまり、言語活動が適切に位置付けられて初めて、その指導が成り立っていくのであって、本テーマである言語活動の充実を行うことは国語科の目標の実現に直結していると考ええる。

また、本テーマの研究を進める上で、身に付けるべき具体的な国語の能力と手立てについて授業研究会で検証していくために、「付けたい力と手立てを明らかにして」をサブテーマとして設定した。

② 基本方針

ア 講話・研究授業・授業研究会を中心に研究を進める。

イ 地区理事を本年度も3名ずつにする。事前研・授業研の運営等は各地区の理事が中心となって実施する。

ウ 研究授業では、授業者は学習指導案の他に研究授業の主張点を資料として付ける。

エ 授業研究会では、討議の柱を設け、討議の柱を中心に、実践を踏まえて意見交換をする。

③ テーマに迫る研究のあり方

ア 国語の授業のあり方について学ぶ

濱本竜一郎先生（上益城教育事務所指導主事）による講話から「これからの国語の授業のあり方」について学んだ。

イ 単元を貫く言語活動の設定

国語科では、言語活動を通して指導事項を指導するため、1単位時間の授業の中に殊更に言語活動を位置付けるということはしていない。一方で、国語科特有の単元を貫く言語活動を設定し、単元全体を見通した指導を行うようにしている。研究授業で公開される言語活動は、その単元全体を貫く言語活動の一部であり、国語科では、言語活動が手段にも目的にもなり得るので、研究協議の大事な柱として取り扱ってきた。

ウ 研究授業の主張点

サブテーマに沿い、授業者が授業で付けたい力とその手立てを明確にするために「研究授業の主張点」を作成し、指導案とともに参加者に提示している。「研究授業の主張点」は、「単元で身に付けたい力」「本時で付けたい力」と「そのための手立て」の他「単元を貫く言語活動」「言語活動を遂行するための技能」さらに、「身に付けた力の日常化」の項目から成り、研究授業の開始前のオリエンテーションで参加者に説明し、参観の視点を明らかにして参観できるようにした。

エ 討議の柱を中心にした意見交換

研究授業の参観及び研究会の視点の中心となるものとして「討議の柱」を設定した。限られた時間の中で研究を進めるためには、様々な研究の視点の中から本時の授業で明らかにされる部分に焦点を当てて討議を行う必要がある。事前研究会での協議をもとに「討議の柱」を決定し授業研究会を行った。

また、本時の授業における単元を貫く言語活動や手立てが、身に付けさせたい力を付けさせるために有効であったかについて、それぞれの実践を踏まえて意見交換を行った。以下は、第3回研究

会での討議の柱である。

第3回授業研究会 矢部小学校 坂崎 慎太郎 先生

筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう『鳥獣戯画』を読む

(1) 討議の柱

筆者の意図をとらえ、主張に至る論展開の工夫を読み取る力を身に付けさせるために

- ① 第八段落が必要かどうかを検討させる活動を通して筆者の意図を考えさせる手立ては有効であったか。
- ② 第八段落が筆者の主張の根拠になりえているのかどうかを他の段落と対比させながら考えさせる手立ては有効であったか。

(2) 単元の課題

題名の「読む」の意味を考える

(2) 成果と課題

① 成果

- ・ 今年度も、「国語の授業で学習したことが、日常化につながっていない」という課題をふまえて、主張点の中に「身に付けた力の日常化」という項目を設けた。国語で身に付けた力をどのような場面で活用していくのかを意識した授業づくりを行い、指導計画や手だてが有効であったかどうかについて意見交換ができた。
- ・ 討議の柱を中心に意見交換をしたことで、討議がそれたり広がりすぎたりすることなく、意見交換をすることができ、深めることができた。
- ・ 第2回研究会では、1年生の説明的文章「うみのかくれんぼ」において、内容の大体を読む力を付けさせるために、「本文の写真と文章とを照らし合わせながら読ませる」という手立ては有効であったかという事で議論が交わされた。私たちが日常的に活用している教科書の文章や言葉の一つ一つ、さらに、挿絵や写真がどのような意図でそこに載せられているのかということをも十分吟味した上で授業に臨むことが、いかに重要であるかを考えさせられた。そのような意味でも、第2回の提案授業は大変意義あるものとなった。
- ・ 第3回研究会で行われた6年生の説明的文章『鳥獣戯画』を読むは、これまで、子どもたちが学習してきた説明的文章とは明らかに書き方や表現の仕方が異なる文章である。このような文章に出会ったとき子どもたちはこれまでに身に付けてきた力をどのように使ってどのような読みをするのか、大変興味深い教材である。ある一つの段落に書かれた内容が、筆者の主張とどのようにかわっているのかということを考えさせる活動は、子どもたちも何度か試みている活動でもあり、前後の段落などに書かれていることや、結論部分に書かれている筆者の主張と結び付けて自分の意見を持つことができていた。説明的文章の特徴や付けさせたい力に応じて様々な切り口で授業を構成するという試みは大変参考になった。
- ・ 第4回研究会では、2年生の説明的文章「おにごっこ」において、子どもたちが、日頃の遊び「おにごっこ」の経験と本文とを結びつけて読んでいくという教材になっている。2年生がこれまで読んできた「問い」→「答え」→「まとめ」というスタイルの説明的文章とは違い、答えが明確に書かれていない。そこで、「このように」の後に書かれている文章（終わりの文）を手掛かりに問いの答えを探っていくという活動がとられた。文章に書かれていることを用いて遊びに生かしたり、遊びの経験を読み生かしたり、というように、読み→活動→読み→活動というサイクルを繰り返しながら、結果的に子どもたちは読みを深めていった。終末の活動が、実際の遊びにつながっており、「読みの日常化」という、今日求められている大切な「読む力」につながる提案となった。
- ・ 3本の授業とも「説明的文章の読み」の領域での提案授業で、学年に応じた指導の在り方を学ぶことができた。

② 課題

- ・ 会員一人一人が、授業力を向上させるために、授業を各地区の会員が意見を出し合いながら創り上げるよう計画した。結果的には授業者や授業者の学校の会員が主に関わることとなり、授業者への負担も大きくなってしまった。事前研の持ち方や期日の調整等を工夫し、より多くの会員で創り上げる授業にしていく必要がある。
- ・ 多くの参加者が意見を交わし合えるような様々な研究会のスタイルの工夫が必要である。

4 実践事例

(1) 授業の概要

単元名：筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう『鳥獣戯画』を読む

授業者：矢部小学校 坂崎 慎太郎 教諭

① 単元について

本単元では、『鳥獣戯画』を読む」を教材として取り上げた。絵と文章とを対照しながら読み、筆者のものの見方を捉えたうえで、自分のものの見方をまとめていく。つまり、「事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確しながら読むこと」や友達との交流を通して「自分の考えを広げたり深めたりすること」をねらいとしている。

本教材は、国宝『鳥獣戯画』について、解説（評価）した説明文である。形、大きさ、格好、そして、動きと絵の細部をとらえ、「勢いがある、絵が止まっていない。動きがある。」「見事にそれを表現している、たいしたものだ。」「表現もまた実にすばらしい。」等、最大級の賛辞を送っている。また、常体で一文が短く歯切れがよくリズムのある文章となっている。文末表現には、体言止めが使われ印象に残る。「めくってごらん」「どうだい」等対話的な語りで、臨場感もある。このような様々な特徴的な表現に着目しながら、筆者の主張や主張に至るまでの論展開の工夫を捉えることに適した教材と言える。

1学期には、「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」の学習で、筆者の主張や論展開の工夫を捉え、自分の考えをもちながら読み進める学習を行ってきた。本単元では、絵を読み解いていく筆者のものの見方を捉え、自分のものの見方を広げていく学習を行った。尚、本単元で学んだことは、次教材の「この絵、私はこう見る」で生かすことができる。

② 学習の様子

第1次の活動では、絵を見て気づきを交流させた。そして、『鳥獣戯画』のすばらしさを伝える説明文を書こう」を投げかけ、気づきをもとに自力で説明文を書かせた。本文に出会わせる際、「題名（『鳥獣戯画』を読む）に着目させ、「読む」という言葉を使った筆者の意図を考えさせた。「見る」と「読む」の違いを考えていくことで、筆者が絵のどこに着目し、どう感じたのかに興味を持てるようにした。

第2次では、筆者が、絵のどのような事実を根拠として、解説したり評価したりしているのかを捉えさせるために、筆者の特徴的な表現に着目させていった。また、それぞれの表現や構成の工夫がどんな効果を上げているのかについても考えさせていった。

本時は、段落の事例の中で、筆者の見方が変化している八段落に着目させ、他の段落と対比させ違いを明らかにしたうえで、八段落の必要性について検討させていった。なくても十分に詳細な解説と評価で「鳥獣戯画」のすばらしさは伝わってくるのに、筆者はなぜ、八段落をあえて書いたのかその意図を考えさせていくことで、主張とのつながりを捉えさせていった。

③ 単元の目標

ア 絵と文章との関係を押さえ筆者の考え方を捉え、自分の考えを明確にしながら読むことができる。

イ 文章を読んで考えたことを交流し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

④ 指導計画（8時間扱い）

学習活動	留意点	時間
1 「鳥獣戯画」の絵を見て気づきを交流し、自力で説明文を書く。	・本文に出会う前に「鳥獣戯画」の絵を見ての気づきを交流し合い、その気づきをもとに、『鳥獣戯画』のすばらしさを伝える説明文を書こう」と投げかけ、自力で説明文を書かせる。 ・本文に出会わせ、自身の説明文とのずれについて感想を交流し合う。	3
2 既習教材と比べながら、筆者の工夫（表現や構成等）を読み取る。	・筆者の主張を捉えさせる。 ・文章構成を捉えさせる。 ・本文の説明内容が挿絵のどの部分のことを指しているのか、拡大した挿絵で常に確認しながら読ませていく。 ・筆者の工夫を読み取る際には、既習教材と対比させることで、本文の特徴的な表現を際立たせる。 ・読み進めていく中で、子どもたちの問いをもとに、本文を批評させ、	4

	筆者の工夫（「題名と本文」や「本論と結論（筆者の主張）のつながりなど」やその意図を捉えさせる。	
3	自分の考えをまとめ、交流し合う。	1

⑤ 本時の展開

目標 八段落が必要かどうかを検討することを通して筆者の意図を考え、主張とのつながりを理解することができる。

時間	学習活動	発問 (◎) と指示 (○) 予想される児童の反応 (・) 指導上の留意点 ●	備考
10	1 前時の振り返り、本時のめあてをつかむ。 	◎ 前の時間はどんなことを学習しましたか。 ・『鳥獣戯画』を読む」がどんな仕組み（三部構成）で書かれているのかを考えて、各部屋（段落）に何が述べられているかを確認しました。 ●前時までの学習の中で、子どもから出てきた問いをもとに、本時のめあてを提示する。 ◎「鳥獣戯画」の絵について説明していない段落がありましたね。何段落でしたか？ ◎この段落には、何が述べられているのかな？ 他の段落とのつながりはあるのかな。必要な。	ノート 学びの足跡 掲示用
	【めあて】 「八段落は必要かどうか」について自分の考えをまとめよう。		
30	2 八段落は必要かどうかを検討する。 (1) 個人 (2) グループ  (3) 全体 	●「必要」なのか「必要でない」のか、自分の立場を明確にさせたいうで、その理由を考えさせる。 ●次のようなつながりを視点としてもたせ、理由を考えさせていく。 ① 題名とのつながり ② 他の段落とのつながり ③ 筆者の主張とのつながり ●グループの話し合いでは、一応合意形成を図るように促す。ホワイトボードにまとめさせ、まとまったところから黒板に貼らせる。 ●グループ全体や話し合いでは、「なるほど」と思った友達の考えを随時メモさせる。 ●「鳥獣戯画」のすばらしさ（評価）を学びの足跡をもとに確認（整理）する。 ●筆者の主張とのつながりを意識させ、筆者の主張を支える根拠となり得るかを考えさせる。 【評価】 八段落が述べられている意図を主張とのつながりからまとめることができる。 (ノート・発言)	ノート ホワイトボード
5	3 本時を振り返る。	○授業を通して、もう一度自分の考えを書きましょう。	